
福島原発事故後の現実から原子力防災を考える

(井戸川克隆、科学 83: 545-552, 2013)

2013年9月27日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

2011年3月11日、宮城県沖を震源とする東日本大震災が発生した。この地震動と津波の影響により東京電力の福島第一原子力発電所で放射性物質の放出を伴った原子力事故が引き起こされた。国際原子力事象評価尺度 (INES) において最悪のレベル7 (深刻な事故) に分類される事故となった。

前双葉町長の井戸川克隆氏のこの文献には政府が情報を隠ぺいしたこと、そのために避難誘導が失敗したこと、責任の所在が明らかになっていないことなどが辛辣に書かれており、地域住民の苦悩が震災から二年半がたった今も絶えないことをうかがい知ることができた。

事故の全容はいまだ国民に知らされておらず、現場は今でも放射能が出ている。全容の報告がなされなければ事故の収束にはならず、また事故の対策や再発予防にもつながらないだろうと思う。

さらに避難民は家族分離、家族崩壊、狭い住まいに緊張感がたかまる、孤独、金銭欠乏、持病の悪化、不登校、学業不振などの二次被害をも受けている。さらにこういった二次被害は日に日に増えているのに対し調査は行われておらず、現場の状況が把握されていないということも改めて知った。突然避難指示が出され、なぜいつもどおりの生活ができないのか、なぜもう町に住めないのか、いつ帰れるようになるのか、なぜ被爆したのか、さまざまなことがわからないまま仮設住宅に住まされた住民も少なくない。職場をなくした人は路頭に迷い、家畜やペットたちも被害にあっている。住民の避難体制をより強化し整えることも重要な課題であると感じた。

事故の再発を防ぐために、国民がすべてを知る権利を有すること、公正・中立的な立場の第三者が安全の検証を行うべきであること、その上で再稼働の議論をすべきであること、国民も人任せにせず、自己防衛をすべきであることなども書かれていた。事故は起きないことに尽きる。しかし原発は事故があるということがわかってしまった今、私たちはこの事故から何かを学んで活かしていくべきである。そもそも原発からは放射能が出るものだという考えを改めなくてはならない。放射性物質を一切出さない仕組みを完成させることが再稼働よりも優先されるべき課題だろう。福島原発事故をただ悲惨な思い出に終わらせるのではなく、被災者支援を最優先しながらも前へと進んでいかなければならないと思う。

私たちは被災地、被災者にいまできること、そしてこのような痛ましい事故を二度と起こさないために何をすべきか考える必要があることを改めて考えさせられた機会になった。